「ATAC創立15周年、おめでとうございます」

太陽刷子株式会社
代表取締役社長　小倉　義生氏

ATAC様が15周年 を迎えられましたことに心からお慶びを申し上げます。ATAC様には創立当初よりお世話になり、有形、無形の多大なる成果を戴いております、改めて厚く御礼を申し上げます。

ATAC様が活動を開始されました15年前 と申しますと、ジャパンアズナンバーワンともてはやされた日本経済絶頂期が終わりを告げ、後々「失われた10年 」と称された絶不調期へと向かいつつある頃でありましたがまだまだ実感は乏しく、小生が代表幹事を仰せつかっておりました中堅中小企業を中心とした異業種交流研究会（MATE研究会）も会員数40数社、会員の中心は創業者であり活動も活発でありました。しかしこの頃のヒット曲と言えばリバイバル曲、ベストセラーは「清貧の思想」等その後の「失われた10年 」をイメージさせる社会であったと言えます。

その「失われた10年 」を乗り切り、世紀が代わり、漸く明るさが見えようとしている今日に生き残ってきた中堅中小企業は経営、生産技術も含めた独自技術を確立させてきた企業でありますがこの困難な時代に大企業出身の技術者を中心とした、中小企業では望むべくもない視野の広さ、技術レベルの高さ、人脈の多様さ、関連提携企業の多様さを活用し担当技術者の教育、レベルアップにまでその力を発揮されて中堅中小企業の独自技術の確立に貢献されてきたのがATAC様であります。今では、奈良、和歌山、岡山、広島に兄弟姉妹組織も活動を開始され、またメンバーの中には北は北海道から南は沖縄まで飛び回りまるで売れっ子タレント顔負けの過密スケジュールをこなしておられる方もあるやに聞いております。

このような御活躍の陰には、初代荒川運営委員長様はじめ歴代の会長様、役員様の並々ならぬ御努力とリーダーシップがあるのはもとより各会員様が各自の技術、ノウハウの上に胡座をかくのではなく毎月の会員相互の研修会、新技術・先端技術の研究、先端設備工場の見学等を実施される等日々新しい知識の吸収に励んでおられるというたゆまぬ努力があります。今後ともこの姿勢の上に立って大企業出身者ならではの或いは企業経営者ならではの特徴を発揮されまして我々中小企業の独自技術の確立にお力を貸して戴き、更に20周年、30周年 に向けて御発展されますようにお祈り申し上げます。

最後に、改めて創立15周年 おめでとうございます。

ATAC創立 の頃

ATAC副会長
荒川　守正

私は約15年毎 に、転機が訪れるらしい。31歳（1956年 ）から勤めた父の会社を47歳（72年 ）で辞めて、ナード研究所を始め、62歳（87年 ）で会長、77歳（02年 ）で名誉会長、その後相談役。

異業種交流MATE研究会 には、49歳（74年 ）で入会し、平成2年（90年）に転機の虫が騒いだのか、近畿化学工業界の4月号に、異業種交流だけでは物足りない気持ちを、ATA設立の夢と言う一文に書いた。即ち、当時の高齢者対策が余りにも貧困であったので、60歳過 ぎの元気な退職技術者を集め、お互いに良く知り合った後、新たに企業を起こすなり、中小企業の支援をするなりというような異人種交流会を立ち上げてはと言うものであった。たまたま同じ年に、大阪科学技術センターが創立30周年 を迎え、センターの大きな使命の一つでもある中堅中小企業対策の記念事業に何をすべきかとの諮問が、MATE研究会に出された。

私の提案は、ATA設立の夢の一文そのままであったが、百余件の提案が審議され、①中堅・中小企業人材育成支援事業、②中堅・中小企業表彰制度、③ATAC活動（ATAでは弱々しいとの声があり）の3件がMATE研究会から答申された。センター側ではATAC活動案のみを採り上げ、1991年度 より実施することとし、言い出し兵衛の私に運営委員長をするようにとの指示があった。早速、センターのネットワークの中の有力候補の方々に声をかけ、15人ばかりに集まっていただいた。中には既にコンサルを業としたベテランもおられ、入会金50万円、年12万円 の会費という私の案は、ベテランの人々から、猛烈な反対を受けた。私の考えでは、退職後個人で仕事を始めるにしても、1000万円 ぐらいは用意しなければならず、必ずしもそれが返って来るとの保証もない。ATACに参加するにしても、人々にはそれだけの決意が必要だと思い、賛同者のみで発足した。率直に言って、大企業出身者は、与えられた仕事は本当に旨くこなされるが、新たに仕事を創出することはやや不得手のようである。そこで、MATE研究会の数十社の社長さんらに無理を言って、夫れ夫れに仕事を出して戴き、各社から100万円ず つを戴いた。これは大変有り難い支援であった。又初代と2代 のATAC会長を引き受けていただいた中条弘毅氏（大阪ガス）と水野博之氏（松下電器）にはご心配をおかけしたり、並々ならぬ広報支援をいただいたりした。あれから15年、今日までやってこられたのは、センターは元より実に多くの方々の温かいご支援の賜物と改めてお礼を申し上げたい。そして又もや、私の最後の転機の虫が蠕動しだしたようである。

さて、この次は?